

日本薬剤学会 (APSTJ) ニュース

13

学会活動および今後の展望

社団法人日本薬剤学会会長
京都大学大学院薬学研究科教授

橋田 充

MITSURU HASHIDA

Graduate School of Pharmaceutical Sciences, Faculty of Pharmaceutical Sciences Kyoto University

はじめに

日本薬剤学会は、学会の活動や薬剤学、製剤学領域の動向を会員の枠を超えてより多くの読者に知っていただくために、2007年2月号からファームテクジャパンと連携して日本薬剤学会 (APSTJ) ニュース欄を設けている。日本薬剤学会の現状と今後の展望を紹介させていただいた初回の記事から1年が経過したので、この間の学会の活動を振り返り、今後の展望を紹介したい。

1. 学会活動の概要

1985年に設立以降、薬剤学の進歩および普及を図り、科学、技術、文化の発展に寄与することを使命として活動してきた日本薬剤学会は、2006年4月に社団法人設立の認可を受け、学会活動の場をさらに広げるとともに、内容の充実に取り組んでいる。学会の活動は、年会、セミナー、講習会などの開催、学術誌の出版、研究や研究交流の支援、功績のある研究者の顕彰、薬剤学教育の充実に向けた検討、産官学連携などを目指したプラットフォームの構築、国際交流など多岐にわたるが、この1年間にさまざまな面で改革が進捗した。また、学会広報活動の充実にも積極的に取り組み、学会ホームページの刷新や一般社会との交流の場の創設などが具体化されつつある。

2. 集会、研究推進体制の改革

学会では年会に加え、製剤セミナーや英語セミナー (APSTJ Global Education Seminar) の開催など多くの

行事を主催している。製剤セミナーはすでに32回を数え、泊り込みスタイルによる製剤研究者、技術者の生身の交流、また若手の教育の場として高い評価を受けている。一方、世界をリードする製剤研究者の育成を目標として若手研究者に直接英語での議論や交流の機会を提供する英語セミナーは、2002年度のスタート以来6年間続けられ、若手研究者や学生に大きな刺激と将来の国際舞台での活躍につながる経験を与えている。

また、学会を舞台とした薬剤学研究の推進に向けて、将来ビジョン委員会ではフォーカスグループ制度の導入を提言した。これは、研究者が共通の研究目的や関心に基づいて集まり、従来の研究分野を横断して相互に情報交換や機動的な研究協力を行う組織で、個々の研究活動をネットワーク化した目的指向型のフォーカスグループは、新しい研究アイデアを生み出し、またプロジェクト研究の企画と展開に向けたインキュベータ的機能を果たすものと期待される。現在、将来ビジョン委員会がフォーカスグループの運営委員会としての機能を果たしており、第23年会においてフォーカスグループの立上げが計画されている。伝統的な枠組みの中で与えられた研究領域ではなく、若い研究者によって下から積み上げられた研究分野の創造が期待できることから、薬剤学研究の現状を打破する大きなインパクトが生まれるものと思われる。

3. 学術出版

日本薬剤学会は薬剤学研究のさらなる発展と充実を目指して、公用会誌として「薬剤学—生命とくすり—」を

隔月に刊行し、また、公式英文学術誌「Journal of Drug Delivery Science and Technology (JDDST)」をフランス薬学会 (Association de Pharmacie Galénique Industrielle : APGI) などと共同で、隔月に Editions de Santé 社より刊行している。「薬剤学—生命とくすり—」誌は、本年1月号より表紙デザインをクリーム色を基調にしたものに一新し、併せてグラビア写真の多用など誌面の刷新に取り組んでいる。本号では、リレーブラザ欄で、「新しい薬学教育課程と薬剤学教育」のタイトルで、杉林堅次先生 (城西大学薬学部) と教育分科会委員長の渡辺善照先生 (昭和薬科大学) が提言を寄せられ、また、フォーラム欄では薬学教育における漢方の意義を論じた2編が掲載されている。さらに、レポート欄やニュース欄での学会報告や薬剤学関連情報の提供なども一層充実されつつある。

4. 教育分科会

日本薬学会は昨年度の総会で新たに教育分科会を発足させた。本分科会は、6年制と4年制を並立させる新しい薬学学部教育システムにおいて、専門教育科目としてさらに重要な役割を担う薬剤学教育の充実に向け、学会として議論の場を持つために設けられたものである。これを機に、私立薬科大学協会のもとで薬剤師国家試験問題の検討等を中心に活動をしていた教科検討委員会と国公私立が参加する教員会議等との統合的運営に向けた、情報収集、意見集約、情報発信の拠点となる共通のプラットフォームが生まれることになり、新制度化での薬学、薬剤学教育のあり方について、産業界などの意見も集め検討する。第23年会でも、教育分科会シンポジウムや薬学教員会議を開催し、薬剤学教育のあり方などを議論する予定である。

5. 関連学協会連絡会議

日本薬学会は、優れた医薬品の創製や適正使用を通じた人類の保健・医療の向上を活動の目標とするが、その実現に必要な多面的な活動の中でも、わが国の製薬産業の振興に向けた活動は最も重要な課題と位置づけられる。製薬産業は多くの企業群によって支えられ、一方、医薬品の生産においては、原薬、製剤添加物、包装材料、製剤機械、製造プラント、品質管理システムなどに関与してきわめて多くの種類と数の企業が関わり、全体として

産業が構成されている。こうした背景の下で、本学会に課せられた役割は、製剤研究、動態研究、製剤設計、製造、品質管理、さらに投薬設計や薬事行政などに対して、学産官の連携の下に関連諸分野に共通のプラットフォームを提供し、産業全般の発展と国際調和に貢献することであると考える。その役割を担う組織として関連学協会連絡会議を学会内に設置した。具体的提案として、本組織を窓口とした情報の集約と医療、産業、教育行政等への情報発信への取組みがあげられる。また、日本薬学会のホームページに関連学協会連絡会議の情報欄を設け、各学協会の活動、行事予定などの情報を提供する。第22年会では、関連学協会の活動を紹介するポスター展示コーナーが設けられ各学協会の活動が会員に情報提供されるとともに、産官学が共通の話題で討議する産官学連携シンポジウム「産官学のシナジーで達成する21世紀の品質保証」が開催された。

6. 製剤技術講習会「製剤の達人による製剤技術の伝承」

改正薬事法による医薬品製造販売業と製造業の分離に伴い、企業から製剤の設計、製造のアウトソーシングがますます加速されていくと予想される中、製剤技術の伝承に関心が寄せられている。そこで、日本薬学会では「製剤技術伝承委員会」を発足させ、そのもとで製剤技術講習会を企画した。講習の対象者としては、医療用医薬品製造販売業の製剤技術者はもちろんのこと、受託製造業者、ジェネリックやOTCメーカーの製剤技術者、さらに製剤設計、医薬品製造法に興味を持つ製剤機械メーカー、エンジニアリングメーカー、添加剤メーカーの技術者が想定され、第1回の講習会シリーズは「固形製剤の製剤設計と製造法」をテーマに東京と大阪でそれぞれ6回12コマの講義が開講された。本講習会では、基礎理論、基本的技術の上にトピックス、包装技術も取り入れて広く製剤技術の伝承を行い、また、効率的で合理的な処方設計のためにプレフォーミュレーション、少量スケールでの製剤化検討、開発過程に沿った処方・製造法の決定、さらに、ICH Q8「製剤開発のガイドライン」で強調されている製剤の品質を確保するための工程パラメーターの多面的な組み合わせの中から決定される「デザインスペース」の評価等、製剤設計の合理的なフィロソフィー伝授にも取り組みが行われている。現在は、第2回の講習会シリーズとして、「非経口製剤の製剤設計と製造法」に関する講義12コマが始まっているが、これ

らは学会の賛助会員に対する教育サービスとしても位置付けされており、好評を得ている。

7. 国際交流

日本薬剤学会は、薬剤学研究領域を集約する学会組織としてわが国における本領域の窓口となり、多くの国際学会と強力な連携関係にある。国際薬学連合(FIP)は、WHOを通じた世界の保健行政との一体的な活動、The World Health Professions Alliance(WHPA)を基盤とした世界医師会(医学会)、看護師会などとの協調、いろいろな製薬関係団体、あるいは行政当局との共同活動等、非常に幅広い活動を行っている。組織は、職能部門のBPP(Board of Pharmaceutical Practice)と薬学の学術部門を国際レベルで束ねる組織BPS(Board of Pharmaceutical Sciences)から成り立つ。後者はICH等と同じく、日・米・欧の創薬科学の基盤があり、新薬開発能力がある国(地域)を中心に運営されているが、本学会はその主要メンバーのひとつである。BPSはまた、米薬学会(AAPS)を通じて米国FDAと、ヨーロッパ薬学連合(EUFEPS)を通じてヨーロッパ医薬品庁とも関係を結んでいる。

昨年4月には、FIP/BPS主催の第3回世界薬学会議

(PSWC2007)がアムステルダムで開催され、日本からも約250人が参加して150題の研究報告が行われた。また、8月末には第67回のFIP年会在北京で開催され、日本の薬学研究者がシンポジストとして多数参加した。毎年FIP年会では、ジャパン・レセプションとして薬学研究、薬剤師活動における世界のリーダーを招待するイベントを開催している。こうした活動を企画調整する組織として、日本FIP連絡会議を日本薬剤学会、日本薬学会、日本薬剤師会の三者で運営しており、世界に向けた薬学の情報発信を担っている。

8. 日本薬剤学会第23年会

来年度の年会は、原島秀吉・北海道大学大学院薬学研究院教授が組織委員長を務め、5月20～22日の3日間、札幌コンベンションセンターで開催される。年会プログラムでは、特別講演、年会長講演、受賞講演などに加え、革新的人工遺伝子デリバリーシステム、トランスポーター研究あるいはジェネリック医薬品を主題としたシンポジウムが企画されている。また、大学院生主催シンポジウムも開催される。本稿で説明した、教育分科会、フォーカスグループ制度など、学会の新しい取組みの多くも紹介される予定である。